

# 近世・近代の口頭語資料における時を表す語彙

## —狂言台本と落語速記資料を中心に—

山 際 彰

### 1. はじめに

筆者は、これまで時を表す語彙に注目し、それが近代を起点として大きく移り変わるとの見通しを立て、それらを通史的に観察してきた（山際 2016a, 2016b, 2018 など）。近代が時を表す語彙における転換期の一つであると設定したのは、次のような要因が語彙体系の変化に関わっていると考えられるためである。

#### (1) 社会制度の近代化

日本では明治期に始まる近代化に伴い、様々な西洋の制度を取り入れた。例えば、1872年に鉄道営業が開始され、その翌年には太陽暦が導入された。こうした制度改革は、人々の時間感覚の変化に大きな影響をもたらしたとされる（橋本・栗山編 2001）。急速に進んだ制度改革はことばの面にも強い影響を与えている（松井 2005, 2006a, 2006b, 吉野 2014）。

#### (2) 和製漢語の大量生産

近代の日本は西洋文化を急速に輸入し、それらの概念を表すために大量の漢語が借用・造語された。こうして生まれた漢語は大正期には一般化し、和語との交替を見せたとされる（飛田 1966）。

#### (3) 言文一致の推進

近代には、書き言葉を話し言葉に近づけて書くことを目指す言文一致が推進された。その背景には平易な表現が要請される社会情勢があり、明治期末に概ねそれが確立したとされる（山本 1965）。こうした中で、大量に生産された漢語が淘汰されていったと考えられる（田中 2013）。

上記のうち、(1)、(2)は新語が生まれ、それが既存の語とどう対立したかの問題といえる。具体的には、既存の語と新語が対立することによって、(あ)新語が

定着する、(い) 既存の語が根強く用いられ続ける、(う) 新語と既存の語が意味や用法を分担するなどして併用される、といった結果が生じるといえる。

一方で、(3) は書き言葉と話し言葉の対立の問題と言える。例えば、(え) 従来は話し言葉として多用されていた語が会話文以外の文章にも見られるようになる、(お) 典型的な文章語の使用頻度が激減し、廃語化するなどである。こうした事例を確認するには、話し言葉・書き言葉に見られる特色を把握しておく必要がある。そこで、本稿ではまず「言文一致確立以前」として近世・近代の口頭語資料の語彙調査を行い、そこから時を表す語彙の話し言葉における特色に迫りたい。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査資料

本稿では近世の口頭語資料として狂言台本を、近代の口頭語資料として落語速記資料を用いて、それぞれの資料に見られる時を表す語彙を全て抽出する悉皆調査を行った。まずは、調査資料について説明する。近世の資料として用いたのは、大蔵流の十八代宗家である大蔵虎寛が寛政四年（1792）に書写した『大蔵虎寛本狂言』（以下、『虎寛』）である。現存する狂言台本の中で『虎寛』を選択したのは、口頭で伝承を重ねていく狂言台本にあって近世の言語実態を反映しているとされるためである（蜂谷 1977 など）。テキストは岩波書店の『大蔵虎寛本 能狂言』（1938-45）の上中下巻を使用し、その詞章の全てを調査範囲とした。

近代の資料には三遊亭円朝口述、若林珣蔵・酒井昇造筆録の『怪談牡丹灯籠』（1884）（以下、『牡丹』）を用いた。同作品は、落語家である三遊亭円朝による長編怪談噺であり、日本最初の速記本であるとされる（清水 2007b）。口述という点で口頭語資料という条件を満たすほか言語量が十分であること、落語という性質上、当時の庶民にも理解されるような平易な言葉遣いが期待されることから、調査資料として選定した。テキストには日本近代文学館の『名著復刻全集 怪談牡丹灯籠』（1968）を用い、序跋文を除く全文を調査範囲とした。

### 2.2 調査対象及びその分類

続いて、調査対象となる語の基準と本稿で主に取り上げる部分について述べる。調査範囲は、表 1 の「時を表す語彙」の範囲とし（表 1 の太枠内）、「時に関する語彙」は除いた。なお、語の抽出にあたって（i）～（iii）のような基準を設けた。

表 1 時を表す語彙の範囲

時を表す語彙	時間軸上において範囲を指定する	基準時が変化する	発話時を基準時とする	過去	昔、最近、昨日、昨夜	
				現在	今、現今、今朝、今月	
				未来	将来、近日、来週、再来年	
				発話時以外を基準時とする	時間的前後	翌日、翌週、前月
		基準時が常に一定	太陽の運行を基準時とする	日以上の単位区分	年月週日	2018年、12月
				季節	朝、昼、宵、正午	春、冬、初夏
			日未満の単位区分	朝昼夜	朝、昼、宵、正午	19時、午前5時
			時分秒	19時、午前5時		
			歴史的事実を基準時とする	時代	中古、江戸時代	
		基準時をとらない	特定の漠然とした時	時間	頃、時、折、漁期	
不明瞭で漠然とした時	不定時		いつ、いつか			
時に関する語彙	時間量を表す	事態存続の時間量	固定時間量	5分（間）、2時間		
			流動時間量	一瞬、しばらく		
		起動までの時間量	時間量少	急に、突然、すぐ		
			時間量中	程なく、やがて		
		時間量大	ようやく、ついに			
	事態の進展を表す	様態の進展	次第に、徐々に			
時間の進展		日々、刻々と				

- (i) 時を表す語彙に含まれる語であっても、当該の文脈で時以外を表している場合は採らない。[例] 近頃目出度い…程度の強調
- (ii) 固有名詞（またはその一部）は採らない。[例] 今参り（人名）、前九年（合戦名）
- (iii) 熟語や慣用句の一部のように、それ自体が一つの固定した表現になっているとみなされる語は採らない。[例] 三日月、当世様、跡へも先へも

表 1 の設定にあたっては仁田（2002）を参考とし、時間軸上においてある事態が発生・存在する際の範囲を示す語彙（＝時を表す語彙）と、それ自体は時間軸上に位置する訳ではなく、事態のありかたや時間量を表す語彙（＝時に関する語彙）に分類した。本稿で扱う「時を表す語彙」は概ね仁田（2002）の〈時の状況成分〉に、「時に関する語彙」は〈時間関係の副詞〉に相当し、前者を調査対象とする。

- (4) 時を表す語彙：時間軸上で、ある時点や期間を表す語または接辞<sup>1)</sup>。時を表す機能語（助詞や助動詞）は除く。【＝調査対象】

時に関する語彙：時点や期間を表さず、時間量や「事態の出現や展開や存在のありよう」(仁田 2002)を表す語。

また、表 1 に二種類の網掛けで示した部分は、本稿で特に注目する語群である。薄い網掛けで示した部分は「発話時を基準時とする時を表す語彙」で、筆者がこれまでの研究で取り上げてきた語群である。本稿ではこれらを「相対時(を表す語彙)」と呼ぶ。また、濃い網掛けで示した部分は「太陽の運行を基準時とする時を表す語彙」で、本稿ではこれらを「絶対時(を表す語彙)」と呼ぶ。以上、これら二種類の意味分野を中心に、それ以外の語群にも適宜触れながら考察を進めていく。

### 3. 調査結果とその分析

#### 3.1 近世の口頭語資料 一大蔵虎寛狂言一

ここからは、実際の調査結果を元に近世・近代の口頭語資料における時を表す語彙の使用実態を見ていきたい。まずは、『虎寛』を取り上げる(稿末の資料 1 を参照<sup>2)</sup>)。今回、『虎寛』から時を表す語彙として抽出した語は、延べ語数にして 3151 語、異なり語数では 138 語であった。この数値を後述する『牡丹』の調査結果と比較すると、異なり語数がほとんど変わらないのに対して延べ語数が『牡丹』の 3 倍以上であるという結果であった。『虎寛』では(5)と(6)のように、話が異なっているでも冒頭がほとんど同じ文章となっていたり、(7)のように、同じ話の中で特定の語が繰り返し使用されたりする傾向が見られる。異なり語数がほぼ同数である『牡丹』に比して『虎寛』の延べ語数が多いのは、こうした狂言の資料性を反映した結果であるといえる。

(5) <sup>(-のアド)</sup> 罷出たる者は、此当りに住居致す者で御座る。今日ははつ裏で御ざるに依て、鞍馬へ参詣致うと存る。(虎寛・連歌毘沙門、上 143)

(6) <sup>(主)</sup> 是は此当りに住居致す者で御ざる。今日は初とらで御ざるに依て、鞍馬へ参うと存る。(虎寛・くらまゝいり、中 66)

(7) <sup>(亭主)</sup> 念無う早かつた。汝を呼出す事別成事でもない。例年の通り、けふは松囃子をせうと思ふが、何と有うぞ。〈略〉<sup>(亭主)</sup> <sup>(いは)</sup> いて云ふは、例年の通り、今日はまつ囃子を致します程に、何れも御出被成て被下い、と云て呼まして来い。  
<sup>(太郎冠者)</sup> 畏て御座る。(虎寛・松やに、上 153)

度数の高いものに注目すると、「今」(度数 609)や「時」(度数 206)、「けふ」(度数 141)といった時代や資料を問わず古くから使用されている語が上位に並んでいる<sup>3)</sup>。こうした基本的な語を除くと、「最前」(度数 193)や「時分」(度数 111)が注目される。この二語は中古や中世前期の文学作品にはほとんど見られず、中世後期の言語実態を反映しているとされる『大蔵虎明本狂言』(以下、『虎明』)や近世の戯作類、歌舞伎の脚本などに多数の用例が確認される<sup>4)</sup>。よって、「最前」と「時分」は中世後期～近世の口頭語として特徴的な語であるといえる。

- (8) <sup>(シテ)</sup> あれへ参たは私の甥で御座るが、きやつが申事に、百に一つも誠は御ざらぬ。〈略〉ヤイ\、最前貫ふた三ごんの鱸の内、一こんあらへといへ。エイ。なう御聞きやるか。<sup>(アト)</sup>何事で御座る。<sup>(シテ)</sup>最前<sup>(さるかた)</sup>去方より此度<sup>(とう)</sup>の頭<sup>(いと)</sup>を経営<sup>(いと)</sup>と有て、鱸を三献貫ふた。内一こん洗へと云付た程に、何ぞ料理を好しめ。  
(虎寛・鱸包丁、中 148-149)
- (9) <sup>(シテ)</sup> イヤ\、幼少の時分射ました。<sup>(教へ手)</sup>幼少の時分みた成らば破魔弓で有う。  
(虎寛・八幡の前、中 242)

さて、ここで『虎寛』に見られる「相對時」と「絶対時」の語に注目したい。『虎寛』で使用されている「相對時」の語の中で度数が高いものには、「最前」(度数 193)、「此間」(度数 125)、「夜前」(度数 26)、「近々」(度数 20)、「先度」(度数 14)などが挙げられる。「最前」は『虎寛』の中で特に度数の高さが目立つ語である。山口(2004:64-65)では、「最前」は「古くから「最後」などと対になる語として、〈略〉「最初」とか「真っ先」というほどの意」を表していたが、『虎明』では時(至近過去)を表す語として多用されるようになることが述べられている。このことから、「最前」の使用頻度の高さは語自体が持つ口頭語の性格に加え、『虎明』から詞章が引き継がれてきた面が大きいと考えられる。また、「先度」も近世の口頭語として特徴的な語である。『虎寛』以外には近松浄瑠璃や歌舞伎脚本に見られる一方で、『牡丹』では一例も見られず、近代の雑誌類にもわずかに例が見られるのみである<sup>6)</sup>。

- (10) <sup>(アト)</sup> 夫先度上の山を山伏が通たに依て、身共がして取らうといふたれば、あれもそなたがやつたでは無いか。  
(虎寛・文山立、下 260)

「夜前」は、遠藤（1975:46）において平安時代の記録語とされるが、同時に「中流以下の貴族から一般庶民の間に広く使われた、男性中心の口頭語である」ともされる。この記述から、「夜前」は早くから口頭語として用いられていたことが推定される。また、台詞が具体的に記されている狂言台本の中では現存最古の『虎明』の時を表す語彙を調査した玉村（2002）では、「夜前」を「俗で平易な語」として日常語の中に位置付けている。これに本稿で調査した『虎寛』での使用状況を加味すると、「夜前」は中古～近世の口頭語として広く用いられてきた語であるといえる。「近々」は山際（2017）で述べたように、『虎明』には見えない語であり、近世の口頭語として特徴的な語であるといえる。

- (11) <sup>(主)</sup> 是は此当りに住居致す者で御ざる。夜前<sup>(きるかた)</sup>去方へ振舞に参て御ざるが、  
大酒<sup>(たいしゆ)</sup>の上で、何やら貰うて、太郎くはじやにわたいたと存て御ざるが、はつたと  
わすれて御座る。〈略〉扱夜前<sup>(し)</sup>の座敷は染うた座敷では無かつたか。

(虎寛・柑子<sup>かうじ</sup>、中 130)

- (12) <sup>(主)</sup> 是は此当りに住居致す者で御ざる。某<sup>(いちにん)</sup>忰を一人持て御座るが、段々成人  
致いて御ざるに依て、近々差初を致させうと存る。〈略〉汝を呼出す事別成事  
でもない。忰も段々成人したに依て、近々差初をさせうとおもふが、何と有う  
ぞ。

(虎寛・鐘の音、中 48)

「絶対時」の語を見ると、「夜」（度数 51）や「晩」（度数 11）、「朝」（度数 5）といった汎時的に用いられる基本的な語に加え、「未明」（度数 11）、「夜深」（度数 5）、「元朝」（度数 2）といった一日のうちの特定の時間帯を表す様々な語が使用されていることがわかる。これは後述の『牡丹』にも共通していることから、「絶対時」の語の種類が豊富であることは口頭語資料における時を表す語彙の一つの特徴であると考えられる。

- (13) <sup>(主)</sup> 夜が明た成らばおこせ。<sup>(シテ)</sup>心得ました。(虎寛・成上り、中 74)

- (14) <sup>(シテ)</sup> 喰ふたものをわするゝといふ事が有る物か。朝くふたか。晩にくふたか。  
<sup>(太郎冠者)</sup> 朝<sup>(たべ)</sup>給ました。(虎寛・文蔵、上 318)

- (15) <sup>(シテ)</sup> ハア。是はいかな事。明朝未明に御使に被遣るゝに依て、一番鳥がう  
たふた成らばおこせと被仰付た。(虎寛・鶏泣<sup>けいりう</sup>、中 41)

- (16) <sup>(シテ)</sup> 其通りじや。扱夫<sup>(つぎ)</sup>に付、明日は元朝<sup>(あす)</sup>じや。〈略〉(虎寛・麻生<sup>あさぶ</sup>、上 107)

「相對時」と「絶対時」以外の語については、「時」(度数 206)や「間」(度数 50)、「頃」(度数 12)などの時間を表す語彙の多用が目立つ。これらは時代を通して見られる語であり、口頭語資料には平易な語が用いられていることを示している。また、時代を表す語彙の「御代」(度数 44)の度数の高さが目立つが、これは(17)や(18)のように冒頭の定型的な表現で多用されていることが影響している。(19)の「いつ」(度数 54)のような不定時を表す語の多用も指摘できるが、これも数名の話者の対話によって物語が進行していく狂言の特徴によるところが大きい。

(17) <sup>(シテ)</sup> 此当りにかくれもない大名です。天下治り、目出たい御代で御ざれば、  
此間のあなたこなたのすまふの会は、おびたゞい事で御座る。

(虎寛・蚊相撲, 上 252)

(18) <sup>(シテ)</sup> 是は此当り住居致す者で御座る。天下治り、目出度御代で御座れば、  
此間のあなたこなたの立花の会は、おびたゞい事で御座る。

(虎寛・<sup>しんぼひ</sup>真奪, 中 155)

(19) <sup>(兄)</sup> やあら、汝は人間あしい事をいふ。いつ身共が舍弟した事が有るぞ。<sup>(シテ)</sup>  
云うた成らば恥をか、うがの。

(虎寛・舍弟, 下 246)

以上、近世の口頭語資料として『虎寛』における時を表す語彙について見てきた。その結果、度数の上位には時代や資料を問わず使用されるような基本的な語が並ぶこと、「相對時」を表す語として「最前」や「夜前」といった語が挙げられること、口頭語資料においては「絶対時」の語の種類が豊富であることなどを述べた。

### 3.2 近代の口頭語資料 —怪談牡丹灯籠—

ここからは、近代の口頭語における時を表す語彙の使用実態を探るため、落語速記資料である『牡丹』を取り上げる(稿末の資料2を参照<sup>7)</sup>)。抽出した延べ語数は1003語、異なり語数は148語である。最も度数が高かったのは「時」(度数 107)で、「今」(度数 81)がそれに続いている。その他、「相對時」の語として「今日」(度数 51)や「明日」(度数 21)などが高頻度語として挙げられるほか、「絶対時」の語として年月週日を表す「-月」(度数 38)や「-日」(度数 21)、朝昼夜を表す「夜」(度数 26)などの基本的な語が並んでいる。この点については、近世の『虎寛』の調査結果と同様である。なお、『牡丹』とはほぼ同時期に刊行された『言海』(1889-91)

で『牡丹』における時を表す語彙がどの程度登録されているかを確認すると<sup>8)</sup>、その値は88.5%にのぼる(小数第二位を四捨五入)。このことから、『牡丹』の時を表す語彙は全体として平易な語で占められていることがわかる。

(20) \* 「マァ一服召あがりませ。今日は能く入しやつて下さいました。平日は妾と嬢様ばかりですから、淋しくて困て居る所誠に難有うございます。

(牡丹、一九オ)

(21) 平「それ何月何日の事だノ。孝「ヘイ。四月十一日だと申す事で御座います。

(牡丹、一五ウ)

(22) 伴「おみね、夜が明けたから萩原様の所へ一所に往て見やう。

(牡丹、七一ウ)

「相対時」の語について見ると、過去を表す語彙の豊富さが目立つ。度数の高い「兼て」(度数13)や「此間」(度数12)、「以前」(度数9)などは『虎寛』と共通する一方で、「先刻」(度数7)、「先程」(度数6)が『牡丹』特有の語として挙げられる。これらの語は『虎寛』で多用されるも、『牡丹』には少数あるいは皆無である「先度」や「最前」といった語の代わりに果たしているといえる。

(23) 相川「それに良石和尚の智識なる事ハ兼て聞及んでハ居ましたが、応験解道究りなく百年先の事を見ぬくといふ程だと承つて居ますが、〈略〉。

(牡丹、十六ウ)

(24) 孝「〈略〉私ハ此間五郎三郎から小遣を貰ひ、江戸見物に出掛けて来て未だこちらへ着て間も無くお前に巡り逢て此事が知れるとハ何たら事だねへ。

(牡丹、十一十二オ)

(25) 国「さうサ。先刻御隣の源さまが入しやつたのサ。(牡丹、二二六オ)

(26) 婆「〈略〉。お嬢様先程申ました事ハ宜しうございますか。(牡丹、七十一ウ)

「相対時」の語の中には「先刻」(度数2)、「過日」(度数1)のように現代から見ると文章語的な漢語も見られるが、「過日」は(27)のような手紙の書面を読み下す場面、「先刻」は(28)のような登場人物が礼を述べるといふかきこまった場面で用いられている。そのため、典型的な口頭語であるというよりは限られた場面でのみ使用される語であるといえる。



- (27) 源「然らば是を見いと投出す片紙の書面。孝助手に取揚げて読み下すに、「一筆申入候。過日御約束致置候中川漁船行の義は来月四日と致度、就ては釣道具大半破損致し居候間、〈略〉」と。(牡丹、二 28ウ)
- (28) 孝「お母様有難う存じます。〈略〉それからお母様先刻ツイ申上げ残しましたが、私は相川新五兵衛と申者の方へ主人の媒酌で養子に参り、男の子が出来ました。貴方様には初孫の事故お見せ申したいが、此度はお取急ぎでございませうから、何れ本懐を遂げた跡の事にいたませう。(牡丹、十一 12ウ)

また、「絶対時」を表す語彙の中でも「今夜」(度数 19)や「今晚」(度数 12)、「昨夜」(度数 9)といったように「絶対時」ではあるものの一日の中のある特定の時間帯を表す語が多数用いられている。しかし、その中で『虎寛』において多用されている「夜前」が『牡丹』には 1 例も見られないことが注目される。『牡丹』では、「夜前」に相当する語として「昨夜」や「昨夜」(度数 4)が用いられている<sup>9)</sup>。これは、近代には造語力の強い「昨-」を含む語の勢力の拡大を示唆しているといえる。

- (29) きみ「私しハ御居間などにハ御掃除の外参つた事ハ御座いませんが、無御心配な事で御座いませう。私しなぞは昨夜の事ハさつぱり存じませんで御座います。誠に驚き入りました。(牡丹、五 22ウ)
- (30) 新「イ、へ、女なんぞは来やアしません。男「そりやアーいけない。昨夜覗ひて見たものが有るのだが、あれは一体何者です。(牡丹、三 46オ)

「絶対時」の語を見てみると、朝昼夜を表す語彙では物語の内容を反映してか夜に関する語が多く、「夜」(度数 26)、「晩」(度数 22)、「夜」(度数 5)、「夜分」(度数 2)などが使用されている。また、時分秒を表す語彙が多様であることも指摘される。これは、開化期に新たな時刻制度が導入され(松井 2006a)、その新しい方法(二十四時制)と旧来の方法(一二時制)がこの時期には併存していたことによると思われる。(32)の例がこのことを端的に表している。全体と比較すると異なり語数がほぼ同じで延べ語数が『虎寛』は『牡丹』の 3 倍以上であることを 3.1 で述べたが、「絶対時」で見た場合は延べ語数にほとんど差が見られないという結果であった。これは、『牡丹』で「絶対時」が多用されていることを示している。

(46)

(31) 伴「そうだが、大層<sup>きれい</sup>奇麗な女で奇麗<sup>きれいほど</sup>程尚ほ怖いもんだ。明日の<sup>あした</sup>晩己と一所<sup>ばんをれ</sup>に出な。<sup>いつしょ</sup> (牡丹, 四 16 オ)

(32) すると、<sup>どき</sup>八ツ時今の三<sup>じ</sup>時半頃殿様が御帰りにになりましたから玄関まで皆々<sup>おでむか</sup>御出迎ひをいたし、〈略〉。(牡丹, 五 21 ウ)

その他の時を表す語彙に注目すると、『虎寛』と同じく「時」(度数 107) や「内」(度数 49) などが高頻度語として挙げられる。すなわち、これらは時代やジャンルを問わず近世・近代の口頭語において主要な語であったといえる。

(33) そうこうする<sup>うち</sup>内に日も暮れましたれば、女房ハ「私<sup>わた</sup>しや見ないヨ。」といひながら戸棚へ這入るといふ騒ぎで、彼<sup>かれ</sup>是<sup>これ</sup>して居る<sup>ゐ</sup>うち夜も段々と更けわたり最<sup>も</sup>う八ツになると思ふから、伴藏ハ茶碗酒でぐい／＼ひつけ酔<sup>よ</sup>た紛<sup>ま</sup>れで掛合積<sup>かけあふ</sup>り<sup>つ</sup>で居ると其<sup>その</sup>内<sup>うち</sup>八ツの鐘がポーんと不<sup>しの</sup>忍<sup>ぼず</sup>の池に響<sup>ひび</sup>て聞<sup>き</sup>へるに、〈略〉。

(牡丹, 四 17 オ)

#### 4. 文章語資料との比較

ここで、前節までの結果を近代の文章語資料と比較する。比較対象には国立国語研究所(1959)を用いる。同論文は、国立国語研究所による『郵便報知新聞』の語彙調査について述べたものである。1877年11月1日～1878年10月31日の一年分の記事、約128万語の中から約10万語を抽出するという調査で、明治期の文章語を知るために適している。使用度数が9以下の語は使用度数1～9とされているため、本稿では使用度数が10以上の語を比較対象とする。

まず、時を表す語彙全体で使用頻度の高い語に注目すると、「時」(度数 247) や「今」(度数 164) など『虎寛』や『牡丹』において高頻度で使用されていた語が『郵便報知新聞』でも高い頻度で用いられている。これらは現代においても基本的な語であり、時代や資料性が異なっても使用頻度の高い語であり続けているといえる。一方で、文章語資料であることを反映した結果として「相對時」の語に注目すると、「本月」(度数 74)、「本年」(度数 59)、「昨今」(度数 42) など『郵便報知新聞』にのみ見られる語が多数挙げられる。『虎寛』にも『牡丹』にも見られず、『郵便報知新聞』にのみ見られる「相對時」、「絶対時」の語を示すと次の通りである。

- (34) 相対時：本月、本年、本日、<sup>ほんげつ</sup> 昨今、<sup>ほんねん</sup> 一昨日、<sup>ほんじつ</sup> 去月、<sup>さくこん</sup> 先頃、<sup>いっさくじつ</sup> 自今、<sup>きよげつ</sup> 現今、<sup>さきころ</sup> 頃日、<sup>しこん</sup> 不日、<sup>げんこん</sup> 先年、<sup>けいじつ</sup> 目下、<sup>ふじつ</sup> 他日、<sup>せんねん</sup> 現時、<sup>もくか</sup> 客歳、<sup>たじつ</sup> 午前、<sup>げんじ</sup> 午後、<sup>かくさい</sup> 正午、<sup>げじゆん</sup> 下旬

挙がった語を見ると、「先頃」以外が全て漢語であることがわかる。「相対時」の高頻度語には『虎寛』や『牡丹』で多数見られた「今夜」や「今朝」といった一日の中の時間区分を指す語は確認されない。よって、一日の中の時間区分を指す語彙は近世・近代の口頭語に特徴的なものとみなすことができる。また、「絶対時」を表す語彙で『郵便報知新聞』に特有な高頻度語は少ない。新聞という媒体の影響も想定されるが、「午前」(度数 92)や「午後」(度数 110)が高い頻度で用いられていることを加味すると、文章語では口頭語の多様な「絶対時」を表す語彙を一部の漢語で表しているといえる。

## 5. おわりに

本稿では近世・近代の口頭語資料における時を表す語彙を取り上げることで、主に次のようなことを明らかにした。

- (Ⅰ) 近世・近代の口頭語資料における時を表す語彙は、一日のうちの特定の時間帯を表す語彙が多く見られることが特色の一つとして挙げられる。
- (Ⅱ) 近代の文章語資料における時を表す語彙は、発話時を基準とした時を表す漢語が多く見られることが特色の一つとして挙げられる。

(Ⅰ)は、近世の口頭語資料である『大蔵虎寛本狂言』と近代の口頭語資料である『怪談牡丹灯籠』に見られる時を表す語彙を観察した結果、得られた特徴である。両資料には「今夜」や「今宵」、「晩」といった一日の中の時間区分を指す語彙が多数確認される一方で、文章語資料である『郵便報知新聞』にはそれらの語が十分に確認できない。このことから、これが近世・近代の口頭語資料における時を表す語彙の特色の一つであるといえる。加えて、時代や資料を問わず用いられる基本的な語は近世・近代の口頭語資料においても高い頻度で使用されること、山口(2004)の指摘と重なる部分はあるが、至近過去を表す語彙の多様化がこの時期の口頭語における時を表す語彙の特徴として挙げることができる。(Ⅱ)は、国立国語研究所によ

る『郵便報知新聞』の語彙調査の結果を、先述の二種類の口頭語資料と比較した結果、得られた特徴である。二種類の口頭語資料には見られず、『郵便報知新聞』に見られる語には「本月」や「本年」、「昨今」といった相対的な時を表すものが多い。その内訳を見てみると、発話時を基準とした時を表す漢語が多数を占めていることから、これが近代の文章語資料における時を表す語彙の特色の一つであるといえる。

ただし、これらは近世の狂言台本および近代の落語速記資料という限られた資料に基づく結論である。同時期の他資料を用いた検証は今後の課題としたい。

## 付記

本稿は、平成 28 年度第二回関西大学国文学会研究発表会で発表した内容に加筆・修正を行ったものである。席上で指摘・教示をしてくださった方々に感謝を申し上げます。なお、本稿は JSPS 科研費 JP17J01634 の助成を受けている。

## 注

- 1) 「此頃」のように元々は句（指示詞コと助詞ノと名詞コロの接続）であっても一語化したと見られるもの、「折」のように単独で用いられにくいもの（形式名詞）も範囲に含めた。
- 2) 『虎寛』には語形が一つに確定できない語が多数存在する（今日：キョウ / コンニチなど）。そのため、資料 1 の語形の欄は当該資料内で最も多く使われている表記形を挙げ、複数の表記が確認される際は表記形の欄に各表記の度数を示した。同様の理由で異なり語数を定めがたいが、資料 1 に掲げた語形の数で判断した。
- 3) これらの語は『日本古典対照分類語彙表』（2014）でも使用数の上位に位置している。なお、次に述べる「最前」や「時分」は同資料には確認されない。
- 4) 「日本古典文学大系」所収の古典文学作品や既刊の索引類の一部を参照した。
- 5) 注 4 に同じ。
- 6) 『太陽コーパス』に 7 例見られるのみで、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』、『女性雑誌コーパス』には用例が見られなかった（検索には全文検索システム『ひまわり』[Ver.1.5.3] を使用し、文字列検索：先度で確認した）。
- 7) 資料 2 の語形の欄は使用テキストのルビによる。ルビなしの語は、期待される語形に含めた上で、ルビなしの旨を表記形の欄に示した。
- 8) 見出し語として挙がっていても、当該の文脈の意味に合致しない場合は登録なし、見出し語の語形が資料 2 の語形と一致していなくても関連する項目で当該の語

形が拳がっている場合は登録ありとみなして計算した。

9) 今回確認した限りでは、これら二語に特別な使い分けは見て取れなかった。

- (i) 「<sup>さくぼん</sup>実ハ<sup>おと</sup>昨晚の<sup>あなた</sup>狼藉者ハ<sup>おしやてい</sup>貴家様の<sup>とを</sup>御舎弟源次郎様とお国さんと<sup>みつう</sup>疾から密通して  
御<sup>おいで</sup>出に成つて<sup>さくや</sup>昨夜<sup>ぬすみと</sup>殿様を殺し、金子衣類<sup>いづく</sup>を窃取り、何国ともなく逃げました」  
と<sup>きい</sup>聞て、〈略〉。(牡丹、七7ウ)

### 調査資料

挙例に際して旧漢字は通用の漢字に直し、ルビは一部を除いて省略した。『虎寛』は使用テキストの巻名と頁数（〔例〕上143：上巻143頁）を、『牡丹』は使用テキストの編数と丁数（〔例〕一9オ：第一編9丁表）をそれぞれ示した。また、必要に応じて「日本古典文学大系」所収の各作品（用例検索には適宜、「日本古典文学大系本文データベース」を利用）や近代雑誌コーパスで用例を確認した。

【近世】大蔵虎寛本狂言：『大蔵虎寛本 能狂言 上中下』（1938-45）岩波書店 【近代】怪談牡丹灯笼：『名著復刻全集 怪談牡丹灯笼 1-13』（1968）日本近代文学館

### 参考文献・URL

- 遠藤好英（1975）「平安時代の記録語の性格—「夜前」をめぐって—」『国語学』100
- 工藤浩（1985）「日本語の文の時間表現」『言語生活』403
- 国立国語研究所（1959）『明治初期の新聞の用語』秀英出版
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表—増補改訂版』大日本図書
- 清水康行（2007a）「怪談牡丹灯笼」飛田良文ほか編『日本語学研究事典』明治書院
- 清水康行（2007b）「三遊亭円朝」飛田良文ほか編『日本語学研究事典』明治書院
- 田中牧郎（2013）『近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店
- 玉村禎郎（2002）「時を表す語彙—漢語の日常語化の諸相について—」玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院
- 仁田義雄（2002）「時間関係の副詞とその周辺」『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 橋本万平（1966）「江戸時代以降の時刻制度」『日本の時刻制度 増補版』塙書房
- 橋本毅彦・栗山茂久編（2001）『遅刻の誕生—近代日本における時間意識の形成—』三元社
- 蜂谷清人（1977）『狂言台本の国語学的研究』笠間書院
- 飛田良文（1966）「明治以後の語彙の変遷」『言語生活』182
- 松井利彦（2005）「近代日本語における「時」の獲得」『或問』9

- 松井利彦 (2006a) 「近代語における《時》表示法の位相」『文林』40
- 松井利彦 (2006b) 「新漢語「時間」の成立と《時》の表示法」近代語学会編『近代語研究 13』武蔵野書院
- 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編 (2014) 『日本古典対照分類語彙表』笠間書院
- 柳田征司 (1991) 『資料による近時時代語基本語詞の研究』武蔵野書院
- 山際彰 (2014) 「「最近」と「近日」」『国文学』98 (関西大学国文学会)
- 山際彰 (2016a) 「近代における時間語彙—「最近」と「近時」を中心に—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十五』和泉書院
- 山際彰 (2016b) 「「現在に近い過去」を表す語彙の変遷」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』
- 山際彰 (2017) 「「近々」の語誌」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十六』和泉書院
- 山際彰 (2018) 「時を表す語における語義変化の方向性—サキザキを中心に—」『日本語学会 2018 年度春季大会予稿集』
- 山口堯二 (2004) 「至近過去を表す副詞の形成」『仏教大学文学部論集』88
- 山本正秀 (1962) 「三遊亭円朝の人情話速記本とその影響」『言語生活』132
- 山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 山本正秀 (1981) 「言文一致運動の展望」『言文一致の歴史論考 続篇』桜楓社
- 吉野政治 (2014) 「青地林宗による時間語彙の創出」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』14
- 国文学研究資料館 日本古典文学大系本文データベース  
[http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta\\_pub/CsvSearch.cgi](http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi) [2018/08/01 確認]
- 国立国語研究所コーパス開発センター 近代語のコーパス  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cmj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/) [2018/12/03 確認]

## 資料1 『虎寛』意味別度数表 (&lt;&gt;内は延べ語数)

## A. 相対時

## A-a. 現在 (1383)

番号	語形	度数	表記形
寛 Aa01	今	609	今 608, いま 1
寛 Aa02	今日	281	今日 281
寛 Aa03	只今	191	只今 113, 唯今 76, たゞ今 2
寛 Aa04	けふ	141	けふ 140, けう 1
寛 Aa05	当年	59	当年 59
寛 Aa06	今夜	41	今夜 41
寛 Aa07	今朝	36	今朝 36
寛 Aa08	今晚	9	今晚 9
寛 Aa09	今年	5	今年 5
寛 Aa10	今宵	4	今宵 4
寛 Aa11	けさ	2	けさ 2
寛 Aa12	当代	2	当代 2
寛 Aa13	ことし	1	ことし 1
寛 Aa14	今生	1	今生 1
寛 Aa15	こん日	1	こん日 1

## A-b. 過去 (522)

番号	語形	度数	表記形
寛 Ab01	最前	193	最前 191, 最ぜん 2
寛 Ab02	此間	125	此間 125
寛 Ab03	むかし	48	むかし 25, 昔 23
寛 Ab04	夜前	26	夜前 26
寛 Ab05	兼て	14	兼て 11, かねて 3
寛 Ab06	きのふ	14	きのふ 14
寛 Ab07	先度	14	先度 14
寛 Ab08	以前	12	以前 5, 已前 5, い前 2
寛 Ab09	兼々	12	兼々 11, かね 1
寛 Ab10	いにしへ	10	いにしへ 9, 古しへ 1
寛 Ab11	昨日	9	昨日 9
寛 Ab12	去年	9	去年 9
寛 Ab13	先月	6	先月 6
寛 Ab14	前々	6	前々 6
寛 Ab15	此所	5	此所 5
寛 Ab16	先	4	先 4
寛 Ab17	此頃	3	此頃 3
寛 Ab18	往古	2	往古 2
寛 Ab19	来し方	2	来し方 2
寛 Ab20	前	2	前 2
寛 Ab21	かつて	1	かつて 1
寛 Ab22	こそ	1	こそ 1
寛 Ab23	此節	1	此節 1
寛 Ab24	最先	1	最先 1
寛 Ab25	近頃	1	近頃 1
寛 Ab26	前方	1	前方 1

## A-c. 未来 (235)

番号	語形	度数	表記形
寛 Ac01	明日	92	明日 92
寛 Ac02	後	31	後 31
寛 Ac03	近々	20	近々 20
寛 Ac04	近日	15	近日 15
寛 Ac05	行々	11	行々 9, ゆく 2
寛 Ac06	明年	8	明年 8
寛 Ac07	跡	7	跡 7
寛 Ac08	向後	7	向後 7
寛 Ac09	末代	7	末代 7
寛 Ac10	あす	5	あす 5
寛 Ac11	のち	4	のち 4
寛 Ac12	行末	4	行末 3, ゆくすへ 1
寛 Ac13	来年	4	来年 4
寛 Ac14	以来	3	以来 1, い来 1, 己来 1
寛 Ac15	後日	3	後日 3
寛 Ac16	後程	3	後程 2, 後ほど 1
寛 Ac17	あした	2	あした 1, 晨 1
寛 Ac18	明朝	2	明朝 2
寛 Ac19	来月	2	来月 2
寛 Ac20	あさつて	1	あさつて 1
寛 Ac21	後々	1	後々 1
寛 Ac22	以後	1	以後 1
寛 Ac23	未	1	未 1
寛 Ac24	ちか	1	ちか 1

## B. 絶対時

## B-a. 朝昼夜〈122〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Ba01	夜	51	夜 51
寛 Ba02	朝夕	14	朝夕 14
寛 Ba03	晩	11	晩 11
寛 Ba04	未明	11	未明 11
寛 Ba05	朝	5	朝 5
寛 Ba06	夜深	5	夜深 5
寛 Ba07	宵	4	宵 4
寛 Ba08	夜中	4	夜中 4
寛 Ba09	夜半	3	夜半 3
寛 Ba10	元朝	2	元朝 2
寛 Ba11	早朝	2	早朝 2
寛 Ba12	昼	2	昼 1, ひる 1
寛 Ba13	夕べ	2	夕べ 2
寛 Ba14	曉	1	曉 1
寛 Ba15	朝ゆふ	1	朝ゆふ 1
寛 Ba16	日中	1	日中 1
寛 Ba17	夕	1	夕 1
寛 Ba18	よ	1	よ 1
寛 Ba19	夜さ	1	夜さ 1

## B-b. 季節〈56〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Bb01	春	28	春 27, はる 1
寛 Bb02	冬	9	冬 9
寛 Bb03	夏	8	夏 8
寛 Bb04	秋	5	秋 5
寛 Bb05	初春	2	初春 2
寛 Bb06	節分	2	節分 2
寛 Bb07	四季	1	四季 1
寛 Bb08	新春	1	新春 1

## C. その他

## C-a. 時間的前後〈15〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Ca01	此かた	9	此かた 9
寛 Ca02	-以来	6	-以来 6

## C-b. 時代〈54〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Cb01	御代	44	御代 40, 御世 4
寛 Cb02	代	6	代 6
寛 Cb03	延喜	1	延喜 1
寛 Cb04	延りやく	1	延りやく 1
寛 Cb05	寛和	1	寛和 1
寛 Cb06	治承	1	治承 1

## C-d. 不定時〈78〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Cd01	いつ	54	いつ 52, 何 2
寛 Cd02	いつぞ	12	いつぞ 12
寛 Cd03	何時	5	何時 5
寛 Cd04	何時か	3	何時か 2, いつか 1
寛 Cd05	いつ	2	いつ 1, いついつ 1
寛 Cd06	いつごろ	1	いつごろ 1
寛 Cd07	いつよや	1	いつぞや 1

## B-c. 年月週日〈120〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Bc01	吉日	23	吉日 23
寛 Bc02	年	20	年 20
寛 Bc03	日	18	日 18
寛 Bc04	-月	8	-月 8
寛 Bc05	-日	8	-日 8
寛 Bc06	正月	7	正月 7
寛 Bc07	豊年	6	豊年 6
寛 Bc08	歳暮	5	歳暮 5
寛 Bc09	縁日	4	縁日 3, えん日 1
寛 Bc10	初とら	4	初とら 2, 初寅 1, はつ寅 1
寛 Bc11	師走	3	師走 2, 四極 1
寛 Bc12	命日	3	命日 3
寛 Bc13	暮	2	暮 2
寛 Bc14	霜月	2	霜月 2
寛 Bc15	-年	2	-年 2
寛 Bc16	卯月	1	卯月 1
寛 Bc17	大晦日	1	大晦日 1
寛 Bc18	月日	1	月日 1
寛 Bc19	晦日	1	晦日 1
寛 Bc20	弥生	1	弥生 1

## B-d. 時分秒〈9〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Bd01	-つ	8	-つ 6, -ツ 2
寛 Bd02	うしみつ	1	うしみつ 1

## C-c. 時間〈557〉

番号	語形	度数	表記形
寛 Cc01	時	206	時 205, とき 1
寛 Cc02	内	144	内 144
寛 Cc03	時分	111	時分 111
寛 Cc04	間	50	間 50
寛 Cc05	頃	12	頃 10, ころ 2
寛 Cc06	最期	11	最期 11
寛 Cc07	折	6	折 6
寛 Cc08	一生	4	一生 4
寛 Cc09	刻限	3	刻限 3
寛 Cc10	節	3	節 3
寛 Cc11	時刻	2	時刻 2
寛 Cc12	ぎは	1	ぎは 1
寛 Cc13	最中	1	最中 1
寛 Cc14	-時	1	-時 1
寛 Cc15	-程	1	-程 1
寛 Cc16	-年中	1	-年中 1



## 資料 2 『牡丹』 意味別度数表 (〈〉内は延べ語数、網掛けは『言海』未登録語)

## A. 相対時

## A-a. 現在 〈219〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Aa01	いま	81	今 81
牡 Aa02	けふ / けう	51	今日 51
牡 Aa03	たゞいま	28	今 28
牡 Aa04	こんや	19	今夜 19
牡 Aa05	ことし	13	今年 13
牡 Aa06	こんばん	12	今晚 12
牡 Aa07	とうねん / たいねん	5	今年 5
牡 Aa08	げんざい	2	現在 2
牡 Aa09	いまごろ	1	今頃 1
牡 Aa10	いまじぶん	1	今時分 1
牡 Aa11	けさ	1	今朝 1
牡 Aa12	こよひ	1	今宵 1
牡 Aa13	こんげつ	1	今月 1
牡 Aa14	こんにち	1	今日 1
牡 Aa15	こんねん	1	今年 1
牡 Aa16	とうじ	1	当今 1

## A-b. 過去 〈140〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Ab01	かねて	13	兼て 12, 予て 1
牡 Ab02	このあひだ	12	此間 12
牡 Ab03	まへ	11	前 10, 旧時 1
牡 Ab04	いぜん	9	以前 9
牡 Ab05	さくばん	9	昨晚 9
牡 Ab06	ゆふべ	8	夕べ 4, 昨夜 2, 昨夜 1, ゆふべ 1
牡 Ab07	むかし	8	昔 4, 昔時 2, 往時 1, 往昔 1
牡 Ab08	このせつ	7	此節 6, 当節 1
牡 Ab09	さつき	7	先き 3, 先刻 3, 前き 1
牡 Ab10	さきほど	6	先程 6
牡 Ab11	このごろ	5	此頃 4, 当時 1
牡 Ab12	さき	5	先 3, 先き 2
牡 Ab13	さくじつ	5	昨日 5
牡 Ab14	さくねん	5	昨年 5
牡 Ab15	さくや	4	昨夜 4
牡 Ab16	おとし / おとし	2	一昨年 2
牡 Ab17	きのふ	2	昨日 2
牡 Ab18	きよねん	2	去年 2
牡 Ab19	さいぜん	2	最前 2
牡 Ab20	さきだつて	2	先達て 2
牡 Ab21	せんこく	2	先刻 2
牡 Ab22	せんだつて	2	先達て 1, 先達 1
牡 Ab23	あと	1	跡 1
牡 Ab24	あとつき	1	跡月 1
牡 Ab25	おとゝひ	1	一昨日 1
牡 Ab26	くわじつ	1	過日 1
牡 Ab27	このひだ	1	此間 1
牡 Ab28	このほど	1	此程 1
牡 Ab29	さきつころ	1	先つ頃 1
牡 Ab30	せん	1	先 1
牡 Ab31	せんげつ	1	先月 1
牡 Ab32	せんじつ	1	先日 1
牡 Ab33	せんや	1	先夜 1
牡 Ab34	とうせつ	1	当節 1

## A-c. 未来 〈110〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Ac01	あと	31	跡 25, 後 5, 後と 1
牡 Ac02	あした	21	明日 18, あした 2, 翌朝 1
牡 Ac03	のち	9	後 8, のち 1
牡 Ac04	めうにち	8	明日 8
牡 Ac05	あす	7	明日 6, 翌日 1
牡 Ac06	らいげつ	7	来月 7
牡 Ac07	らいねん	5	来年 5
牡 Ac08	めいばん / めいばん	4	明晩 3, 後回 1
牡 Ac09	きん	3	近々 3
牡 Ac10	さき	2	先 1, 先き 1
牡 Ac11	めいあした / めいあした	2	明朝 2
牡 Ac12	ゆく	2	行々 1, ゆく 1
牡 Ac13	こうご	1	向後 1
牡 Ac14	ごにち	1	後日 1
牡 Ac15	すへ	1	末 1
牡 Ac16	ちかいうち	1	近いうち 1
牡 Ac17	ちかく	1	近く 1
牡 Ac18	とほからず	1	遠からず 1
牡 Ac19	みらい	1	未来 1
牡 Ac20	めうー	1	明ー 1
牡 Ac21	ゆくすへ	1	行末 1

## B. 絶対時

## B-a. 朝昼夜〈89〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Ba01	よ	26	夜 26
牡 Ba02	ばん	22	晩 22
牡 Ba03	あさ	5	朝 5
牡 Ba04	よる	5	夜 5
牡 Ba05	やちう	4	夜中 4
牡 Ba06	よなか	4	宵中 4
牡 Ba07	さうてん/そうてん	3	早天 3
牡 Ba08	ひる	3	昼 3
牡 Ba09	ひくれがた	2	日暮方 2
牡 Ba10	ひるま	2	昼間 2
牡 Ba11	まよなか	2	真夜中 1, 深更 1
牡 Ba12	やぶふ	2	夜分 2
牡 Ba13	ゆうけい/ゆふけい	2	夕景 2
牡 Ba14	よひ	2	宵 1, 霄 1
牡 Ba15	あさつばら	1	早朝 1
牡 Ba16	くれ	1	暮 1
牡 Ba17	くれ	1	暮々 1
牡 Ba18	さうてう	1	早朝 1
牡 Ba19	につちう	1	日中 1

## B-b. 季節〈3〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Bb01	あき	1	秋 1
牡 Bb02	なつ	1	夏 1
牡 Bb03	はる	1	春 1

## C. その他

## C-a. 時間的前後〈29〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Ca01	よくじつ	7	翌日 7
牡 Ca02	ご	6	後 6
牡 Ca03	よくちやう/よくてう	4	翌朝 4
牡 Ca04	このかた	3	以来 3
牡 Ca05	ーぜん	2	ー前 2
牡 Ca06	とうじつ	2	当日 2
牡 Ca07	よくねん	2	翌年 2
牡 Ca08	よくばん	2	翌晩 2
牡 Ca09	いらい	1	以来 1

## C-b. 時代〈5〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Cb01	だい	3	代 3
牡 Cb02	くわんぼう	1	寛保 1
牡 Cb03	よ	1	代 1

## B-c. 年月週日〈154〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Bc01	ーぐわつ	38	ー月 38
牡 Bc02	ーねん	31	ー年 31
牡 Bc03	ーか	23	ー日 23
牡 Bc04	ーにち	21	ー日 13〈ルビなし 13〉
牡 Bc05	ひ	20	日 20〈ルビ:に 1〉
牡 Bc06	ーつき	4	ー月 4
牡 Bc07	とし	3	年 3
牡 Bc08	ー(くわ)げつ	2	ーヶ月 2
牡 Bc09	ー(くわ)ねん	2	ーケ年 2
牡 Bc10	しよちう	2	暑中 2
牡 Bc11	ほん	2	盆 2
牡 Bc12	きにち	1	忌日 1
牡 Bc13	しよじゆん	1	初旬 1
牡 Bc14	つき	1	月 1
牡 Bc15	つきひ	1	烏兔 1
牡 Bc16	としつき	1	年月 1
牡 Bc17	なかば	1	中旬 1

## B-d. 時分秒〈27〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Bd01	ーつ	19	ーツ 18, ー時 1
牡 Bd02	ーじ	2	ー時 2
牡 Bd03	ーつどき	2	ーツ時 1, ー時 1
牡 Bd04	ーとき	2	ー時 2
牡 Bd05	ーこく	1	ー刻 1
牡 Bd06	はん	1	半 1

## C-c. 時間〈214〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Cc01	とき	107	時 106, 時き 1
牡 Cc02	うち	49	内 18, うち 17, 中 8, 間 6
牡 Cc03	ま	10	間 10
牡 Cc04	じぶん	9	時分 9
牡 Cc05	ーごろ	7	頃 6, 比 1
牡 Cc06	をり	7	折 6, 時機 1
牡 Cc07	あひだ	6	間 6
牡 Cc08	ころ	5	頃 5
牡 Cc09	せつ	4	節 4
牡 Cc10	じこく	2	時刻 2
牡 Cc11	きは	1	際 1
牡 Cc12	こくげん	1	刻限 1
牡 Cc13	さいご	1	最期 1〈ルビ:さご 1〉
牡 Cc14	ーすぎ	1	ー過 1
牡 Cc15	ーぜんご	1	ー前後 2
牡 Cc16	ーちう	1	ー中 1
牡 Cc17	ほど	1	程 1
牡 Cc18	をりから	1	折から 1

## C-d. 不定時〈13〉

番号	語形	度数	表記形
牡 Cd01	いつ	9	いつ 6, 何時 2, 何日 1
牡 Cd02	いつか	4	いつか 2, 早晚 1, 何日 1

(やまぎわ あきら／本学大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC2)